

丸山眞男関係未発表資料翻刻

戦中丸山眞男・小山忠恕書簡 往復 二二点

平石直昭・川口雄一・金子元・山辺春彦（編注）

戦中丸山眞男・小山忠恕書簡の翻刻にあたって

本稿は丸山眞男と小山忠恕の往復書簡を翻刻したものです。小山忠恕は丸山の第一高等学校時代からの友人で、丸山ゆかり夫人の実兄でもあります。この往復書簡は、二人の親密な交流を生き活きと伝えています。また、これまで公刊された丸山の書簡には一九三〇年代から四〇年代前半のものが極めて少なく、その意味で非常に貴重な資料といえます。丸山が徴兵検査をうけた時期など、これまで不明だった伝記的事実の解明に資するところも大きいです。

この翻刻は、丸山彰氏が、ご自身が収集された丸山眞男書簡に加えて、対になる小山忠恕書簡をご提供くださったことによって実現しました。さらには、文中掲載の写真使用もお許しいただきました。氏の多大なるご尽力とご厚情に深く感謝いたします。また、掲載を許可していただいた小山忠恕著作権継承者の吉澤安子氏、澤田朋子氏、最上厚子氏、馬越元子氏、中村直子氏、竹中宣子氏に厚く御礼を申し上げます。

翻刻にあたり、丸山文庫前顧問の平石直昭氏に編注をお願いしました。ご多忙中お引き受けいただき、誠に有難うございました。

丸山眞男記念比較思想研究センター長 和田博文

凡例

一、書簡の配列は発信年月日順とし、配列順に三桁の書簡番号を付した。また、書簡番号の後に（ ）で発信者の名前を記した。（丸山）は丸山眞男、（小山）は小山忠恕を指す。

二、かなづかいや原文のままとした。促音は小書きで統一した。書簡中の傍点、傍線、ルビは原文のままである。

三、漢字は原則として現行字体を用いたが、人名についてはこの限りではない。

四、明らかな誤字は断りなく訂正し、まます脇に（ ）（亀甲括弧）付きのルビを付した。

五、封筒表・封筒裏など、記述の場所を表示する際は「」（ブラケット）を用いた。

六、その他の編者による補足は「」（亀甲括弧）で示した。

七、注で、『丸山眞男集』全十六卷（岩波書店、第四刷、二〇一四—五年）、同別巻（新訂増補、二〇一五年）、『丸山眞男座談』全九卷（岩波書店、一九九八年）、『定本 丸山眞男回顧談』上・下（岩波現代文庫版、二〇一六年）、『丸山眞男話文集』全四卷（みすず書房、二〇〇八—一九年）、同続四卷（みすず書房、二〇一四—一五年）、『丸山眞男書簡集』全五卷（みすず書房、二〇〇三—一四年）、『丸山眞男手帖』（丸山眞男手帖の会、一九九七—二〇一四年、二〇一七年）を参照する際は、出版社・出版年を省略し、書名もそれぞれ『集』、『座談』、『回顧談』、『話文集』、『書簡集』、『手帖』と略した上で、巻数・頁数によって参照場所を示した。

八、各書簡の末尾にタイトルを付し、巻末にその一覧をまとめた。タイトルは内容に即して編者が付した。

九、翻刻にあたり、主として平石直昭が編者注を作成し、資料の整理と本文の校訂は平石・川口雄一・金子元・山辺春彦が共同で行った。

〇二（丸山） 一九三六年八月四日（消印）

先日は失礼。経過順調のことと思ふ。小生やと東京の苦熱から落ちのびたと思ひきや、十数日寂として声なかりし低気圧忽ちに活動を

開始せしため、毎日洞ヶ峠的な天候に悩まされ、まだ、ろく／＼海に入らない。こんな様子なら、東京で君と無駄口きいてた方がお互のためだったと悔んでゐる次第だ。当地は純朴で浜も人影多からず万事小生好み（断じて負け惜みに無之候）。従つて君の病院生活を慰むるに足るニュースのごときは逆立ちしても生れさうもない。ゆうべ、避暑客慰安映画大会というものの、ものしい催があつたから、のぞいて見ると教育映画・衛生映画といった有難いものばかり。それを漁師の子（圧倒的多数）が鼻をす、りながら見てゐる光景はなんと涙ぐましいものだった。万事そんな！調子。

『葉書表』 東京市本郷区駒込病院二ノ一 小山忠恕様

千葉県佐貫町亀田榎本方 丸山眞男

〔入院中の小山に房総避暑地の様子を伝える〕

○「経過順調」。小山がどんな病気で入院したかは未詳。「石井深一郎のこと」〔集〕第十二巻四頁〕によれば、小山は病気で卒業が一年遅れたとあり、回復には時間を要したようである。

○「東京の苦熱」。関連する一節が「増補版 現代政治の思想と行動」一九六四年、未来社、五三三頁（第二部への追記）にある。「ハロルド・ラスキは私の学生時代に、政治学に対する興味を喚起するのに最も与つて力のあつた学者の一人であつた。……大学三年の夏休に、おそろしく蒸暑い研究室の学生閲覧室で“Democracy in crisis”と“The state in theory and practice”を読んだ時の感銘を私は忘れる」とができる。丸山はこの年九月に『緑会雑誌』の懸賞論文に応募しているから、ラスキの読書はその準備の一環であり、この勉勵のあと避暑に出たのかもしれない。なお『回顧談』上巻一六二—一六三頁によれば、大学二年時の『緑会雑誌』の懸賞論文のテーマは「デモクラシーの危機を論ず」で、それに応募する積りで丸山はラスキの上掲書を東北の越河で読んだという。『集』別巻の「年譜」で、大学二年

八月の項に右二書が挙がっているのは、この発言に基づくものであろう（三八―三九頁）。大学「三年」は「二年」の記憶違いかもしれない。ただ『The state in theory and practice』は丸山文庫に一九三五年版が所蔵されているが（登録番号0181976）、*Democracy in crisis*はない。したがって後者は法学部閲覧室で借覧したのであろうが、とすれば二者を読んだ時期がずれていた可能性もある。

○佐貫町亀田は現在の富津市佐貫町亀田。JR内房線に佐貫町駅があり、その北西部方面が亀田で新舞子海水浴場がある。富津市のホームページ「富津市の歴史」から「富津市歴史年表」を開くと、一九一五（大正四）年七月に「佐貫町八幡海岸に「新舞子の浜」海水浴場開設」とある（富津市商工観光課のご教示による）。早くから海水浴場として開けていたわけである。この佐貫滞在中に丸山は「ジャン・クリストフ」を読んで深い影響を受けた。「私が「ジャン・クリストフ」をはじめて読んだのは大学三年の夏休であった。私はその夏は千葉の佐貫町で過ごしたのだが、毎朝その一冊を持って海岸に出て、松林のなかのいつもきまった窪地で読み耽った。八冊目を終えるとすぐまた最初に戻ってとうとう三回続けざまに読んでしまった。それ以後「どうにも抵抗出来ない得体の知れぬ力で不断に私の意識の上にのしかかっている」（『運命的な会遇』一九五三年、『集』第十六卷二三頁）。この『ジャン・クリストフ』は岩波文庫版で親友の松本武四郎が持参してくれたものだった（『回顧談』上巻一〇〇頁「ぼくらの一家が夏休みに避暑していた千葉の房総の東海岸まで、わざわざ持ってきてくれたのです」。なお佐貫は内房側にあるので「房総の東海岸」というのは勘違いであらう）。

〇〇三（丸山） 一九三六年一〇月一六日（消印）

昨日は折角来てくれたのに、留守にして甚だ申し訳ない。実は来週月曜、南原（繁）さんの演習で僕の当番になってゐるので、大あはてで毎日研究室通ひをしてゐる次第。秋休みなんてくそくらへだ。そんなわけで来週から又暇になるから是非遊びに来てくれ。前以て電話をか

けてくれれば間違ない。（番号知らない？ 荻窪四三六六だ） 慶帝戦行くか？ 僕は切符買ふのすっかり忘れちゃった。

「葉書表」 杉並区荻窪三ノ六〇西郊ロッジング内 小山忠恕様

杉並区西高井戸二ノ三七 丸山眞男

〔留守にした詫びと南原ゼミの準備等の近況報告〕

○「南原さんの演習」。大学三年生になった丸山が南原の『政治学史』を受講すると、演習を開くので希望者は申し出よとの口達があり参加した。ヘーゲルの『歴史哲学序説』を丸善経由で公費購入して読んだ（『回顧談』上巻一五六頁）。丸山文庫にはその時の教材である *Die Vernunft in der Geschichte: Einleitung in die Philosophie der Weltgeschichte*, G.W.F.Hegel, Lasson, 1930が蔵されている。登録番号0181167。多くの書込みがあり精読の跡を示す。

○荻窪四三六六。当時の丸山家の電話番号がこれでわかる。同家は一九二一年春に兵庫県精道村大字蘆屋から東京市四谷区麹町に移り、さらに翌年、同区愛住町に転居した。一般家庭に電話機が普及するのは後年だが、おそらく父が新聞記者だった関係で、この家にはすでに電話があった（『回顧談』上巻三三三頁。「愛住町の家で、父は牧野（伸顕）さんの所へ電話をかけると、おふくろによく言っていました」）。次に移った西高井戸の家には電話専用の部屋があり、助教授になった丸山は冬にはその部屋に炬燵を置き、座布団と毛布で防寒して講義原稿の執筆にあたったという（『回顧談』下巻一八一頁）。なお当時の電話のかけ方は、自宅地域の交換方式と、通話先が「市内」か「市外」かによって違っていった。相手が市内の場合、自宅電話機が①自動の場合はダイヤルで相手先に直接通じ、②共電の場合は受話器を上げて交換手に伝え、③磁石式の場合は電話機の右側についているハンドルを回して交換手に伝えた。また相手が「市外」の場合、自宅が①自動ならダイヤルを回して交換局を呼び出して交換手に伝え、②共電なら受話器を上げて交換手に伝え、③磁石式の場合は電話機のハンドルを回して交換手に伝えた。したがって相手が荻窪（市内通話エリア）以外の場合はいずれにしても交換手を介して電話することになる。丸山が自宅の交換方式にかかわらず「荻窪四三六六」と（荻窪の局番

ではなくエリア名を)書いたのは、このためではないかと思われる(以上、NTT史料技術館のご教示による)。

○慶帝戦。六大学野球は大正二四(一九二五)年秋に開始され、翌年から春秋二度のリーグ戦になった。この年の慶応義塾大学・東京帝国大学の対戦は一〇月十七日―二十一日に行われた『運動年鑑』昭和一二年度、朝日新聞社、一九三七年、二五頁)。当時大学野球は人気スポーツで、会場の神宮球場はいつも満員だったという。助手になった丸山は同僚の佐藤功や辻清明らと法学部研究室の屋上で昼休みに三角ベースやキャッチボールをして遊んだ(『回顧談』上巻二二〇頁)。

〇三(丸山) 一九三七年五月八日(消印)

徴兵(第二乙なりき)で帰郷してゐたので失敬した。たうたう古巣に舞ひ戻つたな。今度はさうフラつくわけにも行かぬから勉強出来るだらう。願はくば小山循環式をしてG―W―Gたらしめず、W―G―Wたらしめよ。G―W―Gは悪しき無限なるのみならず、またGefängnis―Wein(od. Wein)―Gefängnisなればなり。W―G―Wは終結的なるのみならず、またWohnung―Geschäft―Wohnungなればなり。やっとお勤めが始まった。九時から五時頃迄、三階の第一共同研究室(つまり大部屋なり)にあるからいつでも寄つてくれ。いまのところ暇で困つてゐる。昨日岡本に会つた。まだ決めない様だ。

「葉書表」小石川区竹早町一〇二 齊藤精一様方 小山忠恕様

丸山眞男

「徴兵検査受検などの近況報告と小山への助言」

○「徴兵……で帰郷していた」。この記述により、丸山の徴兵検査の受検時期がはっ

きりした。検査は前年二月一日から当年一月三〇日まで満二〇歳になる男子青年を対象とし、彼らの本籍地が属する徴募区(徴兵区を細分したもの)で実施された。受検者は体位、健康状態によつて甲種、第一乙種、第二乙種(以上現役に適する者)、丙種(現役には適さぬが国民兵役に適する者)等に分類された。体位は主に身長により、甲と乙の区分は身長と胸囲の比率によつた。甲・乙種の合格者は徴募区ごとに配賦された募集人員数により、甲種、乙種の順に、抽選により、現役、第一補充兵役、第二補充兵役にわけられた。陸軍の第一補充兵役は一二〇日以内の教育召集に応ずる義務があつた(以上、平凡社『大百科事典』大江志乃夫執筆「徴兵検査」、および同著『天皇の軍隊』小学館、一九八二年、六〇―六四頁の摘要)。丸山は一九一四年三月三日生れなので三四年が受検の年だが、大学在学中で延期され、三七年三月に卒業して間もなく検査通知が届き、帰郷し受検したのであろう。そして第二乙合格と判定されたわけである。さらに後に観閲点呼や一九四四年七月には教育召集されているので、第一補充兵役の要員にされたことが分かる(観閲点呼の制度については上掲大江著七五頁参照)。

○「古巣」。書簡の宛先にある「齋藤精一」は小山にとって母方の祖父にあたつた。一高時代の小山は(級友の依頼で)その広い家を労働者の集会のアジトに提供し、無期停学処分を受けた(『回顧談』上巻七七頁)。第二書簡の宛先からもわかるように、その後は下宿生活をしてゐたらしいが、健康上の理由で齋藤宅に戻つたと思われる。

○G―W―G、W―G―W。『資本論』におけるマルクスの範式が丸山の念頭にあつた。WとGはそれぞれWare(商品)とGeld(貨幣)を意味し、W―G―Wは商品売って貨幣を獲得し、その金で他の商品を買うという単純な流通範式を示す(買のための販売)。これに対してG―W―Gは貨幣で商品を買ひ、その商品売って貨幣を得ることを目的とする(売るための購買)。マルクスはこれにより貨幣が資本に転化するとした(『資本論』第四章「貨幣の資本への転化」第一節「資本の一般範式」)。これをもじつて丸山は、小山の生活がこれまでGefängnis(禁足)―Wein(酒)なうWeib(女)―Gefängnis(禁足)という悪循環に陥つてゐたのに対し、Wohnung(住居)―Geschäft(仕事)―Wohnung(住居)という安定した循環になるように望んでいる。

○「お勤め」。東京帝国大学法学部助手の勤務が始まったことを指す。第一、第二共同研究室の同僚や彼らとの交際、助手の業務内容等については、『回顧談』上巻二一五頁以下や「野田良之さんのこと」(『集』第十二巻)に詳しい。

○岡本。一高時代に文乙の同級生だった岡本勝であろう。河合栄治郎の崇拜者だったが治安維持法容疑で検挙され、その衝撃で精神を病むようになった(『回顧談』上巻五二頁)。

〇四(小山) 一九三七年七月八日

その後如何。

名古屋に帰って来てから、例によって一日何もせずにゴロ／＼して居る。何しろ暑いのに閉口して居る。君はまだ毎日研究室に日参のことと思って、大いに同情してゐる次第である。

さて、先日の廿八日に——音楽会で君と会った晩だ——石井にとっつかまって、遂に『その日の中に帰る』といふ鉄則を破棄して仕舞ったつけ。石井は、御承知と思ふが、その翌日に一人で旅に出たのだが、その後どうして居るのか便りが無いので心配して居る。何か彼からでも、または間接にでも、知らせがあったら教へて下さい。

僕は多分十一日にまた東京に帰る。発哺へは十四日頃行くだらう。石井が若し発哺へ現はれたら、僕が行くまで留めて置いてくれと宿屋の方に頼んであるんだが。

今年は大中路は居なくなるし、発哺が些か寂しい。それにこの夏はまとまった仕事も持たないので、専らあの辺の案内人でも勤めて、体

を作る心算だ。三、四日でもひまが出来たら、是非やって来ること。

東京に出た時ひまがあったら研究室にでも押しかけるかも知れない。

さよなら。

眞男兄

忠恕

一九三七・七・八・

〔封筒表〕 東京市杉並区西高井戸二ノ三七 丸山眞男様

〔封筒裏〕 名古屋市中区鶴羽町一ノ一〇 小山忠恕

〔帰省先からの近況報告と発哺行きの誘い〕

○「名古屋に帰って来て」。名古屋市中区鶴羽町一ノ一〇は小山忠恕の実家で、小山磐^{いも}・藍夫妻の住所。夫妻の四女であるゆかり(後に丸山と結婚)は、当時この家に住んでいた。忠恕は前年の病のために卒業が遅れまだ在学中だった。夏休みで帰省したが、いずれ発哺に行くので丸山も来るように誘っている。「例によって……ゴロゴロ」(『その日の中に帰る』)といふ鉄則^{てつそく}などは、彼がまだ本調子ではなかったことを示している。

○「音楽会」。NHK交響楽団ホームページ上の「N響演奏会記録」(<https://www.nhksoo.jp/library/archive/index.php>)によれば、N響の前身である新交響楽団はこの年六月二八日、ワインガルトナー夫妻の指揮によりベートーヴェンの「レオノレ」(運命「田園」)を演奏している(場所は日比谷公会堂)。夫のF・ワインガルトナー(一八六三—一九四二)は著名な指揮者で、来日は大歓迎され、メディアでも大きく報じられた。この書簡からわかるのは、高校時代からクラシックファンだった小山やそれに感化されたらしい丸山が彼の演奏を聴きに行ったことである。

○「石井」は一高文乙同級生の石井深一郎。岡山県矢掛の石井家は名家として知られる。小山と仲がよかったが、翌年卒業した小山が日本興業銀行に就職したのに対し石井は法学部で留年生活を続けたので、本郷キャンパスで丸山と会う機会が

増えた。丸山が杉浦明平と親しくなるには石井の下宿生活も関係していたようである。「石井深一郎のこと」「集」第十二卷三一―八頁。

○「発哺」。志賀高原にある温泉で「宿屋」は「天狗の湯」をさす。宿主だった関金三郎の「発哺清談」(「手帖」第7号)によれば、小山は「東京高等師範学校付属中学時代にキャンプで見たのが初めてです。丸山先生は、小山さんから夏休みに勉強するには最適だと誘われて来られたようです」(三〇頁)、「丸山先生は発哺までクラシックのレコードをお持ちになったり、小山さんはポータブルのステレオをかついで来られました。自室で聴くと他の宿泊客に迷惑がかかるというので、当時の藁葺きの本館の八畳二間ほどの帳場で——皆の集会場のような所でしたが——レコード鑑賞をされました」(二九頁)とある。

○「中大路」は中大路俊安。学生時代は発哺の常連だったようだが、卒業後鉄道省に入って地方に赴任したので、発哺に行けなくなった。丸山文庫には彼からの書簡が蔵されている。

〇〇五 (小山) 一九三七年七月三〇日

東京は暑いことだらう。

僕は二十日に、石井は二十六日に登って来た。この二日三日、天気が悪くて何処にも出ないであるが、今年は相当オカシな連中が揃って、賑やかなことは例年以上である。

何時来るか? 発哺には七曜表なるものは存在しないから、何時でも同じことだ。歩く所はかなりあるから、出来るだけ予定を切り詰めて、こつちに永く居られるやうにして欲しい。まあ宣伝した所で初まらないが、来ることは来るんだらうね。

所で一つお願いがある。アドラツキイ版の“Das Kapital”では、第一巻第一篇第三章(Das geld oder die Warenzirkulation)で貨幣(geld)b)支払手段(Zahlungsmittel)の終りから二番目のパラグラフ——つまりc)世界貨幣(Weltgeld)の前の前のパラグラフ——の最終行、Aus dem Gesetz über Umlaufgeschwindigkeit der Zahlungsmittel……Masse der Zahlungsmittel in geradem/umgekehrtem Verhältnis zur Länge der Zahlungsperioden steht. の個所が、gerademとあるか、umgekehrtemとあるかを調べて欲しい。同じ事柄なのだが、それと共に第二巻の第二篇第九章、前貸資本の総回転、回転循環^回の終りから三番目のパラグラフの最終行、Es gilt hier das früher entwickelte Gesetz: “Die notwendige Masse……steht im ? Verhältnis zur Länge der Zahlungsperioden” の個所ではどうなっているか、調べて下さい。アドラツキイ版多分法科の研究室にあると思ふが、面倒だったら長谷部訳の邦文であたって見て呉れるだけでもよい。——高鼻^高訳は、逆比例となつてゐる。(エンゲルス版)カウツキイが正比例と直してゐるのだ。

昨日は雨で電車が遅れて、新聞——それも郵便屋が毎日二時頃持つて来るのだが——が来なかった。ラヂオもないのだから、此の所世間の騒ぎをまるで余所にしてゐる。

何しろ待つてゐる。あまりおそくならぬ方がいい。早く来ること。

さよなら。

眞男様

一九三七・七・三十・

〇六（丸山）一九三七年八月四日（消印）

〔封筒表〕 東京市杉並区西高井戸二ノ三七 丸山眞男様

〔封筒裏〕 長野県下高井郡平穏村 発哺温泉天狗ノ湯 小山忠恕

〔発哺への来遊を促し、『資本論』諸版の校異を依頼する〕

○「アドラッキイ版の“Das Kapital”」。東京大学法学部図書室に *Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie*/Karl Marx: herausgegeben von Friedrich Engels, Volksausgabe/besorgt von Marx-Engels-Lenin-Institut, Moskau. Moskau: Verlagsgenossenschaft Ausländischer Arbeiter in der UdSSR. が所蔵されている。請求記号は V.I.1.926b。第一巻は一九三二年刊。本書は元のエンゲルス編集版をモスクワのマルクス・エンゲルス・レーニン研究所が普及版として編集公刊し、その所長が V.V. Adoratsky（一八七八—一九四五）だったことから、小山はアドラッキイ版と呼んだようである。丸山の後掲第六書簡に「研究室のアドラッキイ版では」とあるのもこの点を裏づける。

○「高鼻訳は逆比例となつてゐる」。高鼻素之訳『資本論』第二卷（改造社、一九二八年一月）一五二頁に、「この問題については、曩に（第一卷、第三章第三節b、一一一頁）説いた『支払要具（随つてまた一度は前貸さるべき貨幣資本の必要量は、支払期間の長期に逆比例する）』といふ法則が適用されるのである」とあるのを指す（丸山文庫の登録番号0191476）。後文に「カウツキイが正比例と直してゐる」とあることから推して、小山は発哺にカウツキイ版の『資本論』（一九三三年刊）と高鼻訳本とを持参し、『資本論』の読書に励んだようである。

○「発哺」については前掲第四書簡の注を参照。「歩く所はかなりある」「宣伝した所で初まらない」という小山の文は丸山がまだ発哺を訪ねていないことを示している。

○「世間の騒ぎ」。この年七月七日に盧溝橋事件が起こり、現地停戦協定が成立したが日本政府は華北派兵を声明し、日中間の緊張が高まった。そうした状況をさすと思われる。

暑中御見舞申上げます。

二人とも健在の様子でなにより。僕は『「国家学会雑誌」』九月号の編輯会議が終へるとフライになるからすぐ行く。たぶん七日か八日になるだらうと思ふ。兄貴との旅行をやめたから一週間位は滞在出来ると思ふ。行く前に又知らせる。

追伸、小山に、研究室のアドラッキイ版では、“geradem”となつてゐるが、長谷部訳によると、あとで“umgekehrtem”と訂正したとある。委細面談。

〔葉書表〕 長野県下高井郡平穏村 発哺温泉天狗ノ湯

小山忠恕様 石井深一郎様

東京本郷 まさを

〔発哺行きの手定を告げ、小山の質問に答える〕

○この書簡から、丸山の発哺初滞在が、助手の一年目で三十七年の夏休みだったと確認できる。関係者の残した回想類には丸山が学生時代から発哺で夏を過ごしていたとする（そう解釈できる）ものが多いので、この点は重要である。竹下由美子「山の友だち」（『集』第一巻、月報8所収）は、戦前戦中の夏の発哺温泉に滞在する学者らの交歓を紹介した名文だが、そこに「常連の若手」「鋭鋭錚々たる学究トリオ」の「東大生諸氏」（傍点は編者）として、小山忠恕・石井深一郎とともに丸山眞男が挙げられている。「この三人は、宿の長男でスキのチャンピオンだった関金三郎氏と年齢も近く、その弟の豊治君とともに、宿の催しもののブレインだった」（七頁）。丸山も学生扱いされていたことがわかる。そして丸山自身も発哺滞在客の大先輩にあたる木村健助の死を悼む書簡で「先生と奥様に親しく口をきいていただける

ようになったのは、昭和十一、二年ごろと記憶致します」と書いている（『木村先生の思い出』一九七九年一〇月二〇日付、『木村健助先生の追憶』所収、関西大学法学会、一九八〇年、のち『話文集』4収録）。昭和十一年なら大学三年の時にあたる。さらに吉祥寺自宅の隣家である三雲祥之助夫妻（春陽会所属の画家）と自分とが多くの共通する知友で結ばれていた奇縁を語るなかで「私は学生時代の終りから兵隊にとられるまでほとんど毎夏を志賀高原の発哺温泉で過していた」と記している（『お隣の三雲さん』一九八五年四月三日付、『集』第十二巻一八七頁）。「学生時代の終り」といえば、大学三年の夏と思うのが普通であろう。それは一九三六（昭和十一）年の夏にあたる。

これを裏づけるような桑原武夫の回想がある。『中央公論』一九六六年一〇月号の「私の定宿」シリーズに、彼が同じ発哺・天狗の湯を定宿とする丸山と一緒に寄せた文章には「昭和十一年、丸山さんに出会ったことは、私に社会科学の有効性を信じさせるきっかけになった」とあるのである（『集』第十六巻三九一頁の松沢弘陽執筆の解題に所引）。

問題は雑誌同号に載せた文章で丸山が桑原との出会いを「私はまだ大学を出たばかりの青二才だが、当時すでに桑原さんは大阪高校の教授で」と書いていることである（『集』第十六巻三三二頁）。丸山は卒業後間もない時期としているわけで、それは昭和十一年にあたる。つまり一九六六年の時点で初対面の時期に関して二人の間に記憶の齟齬があり、七〇年代末―八〇年代前半の丸山が発哺初滞在を「昭和十一、二年」「学生時代の終り」というように幅をもたせて書いたのには、桑原の回顧に影響された面があるかもしれない。しかし最晩年の丸山は親友の永山正昭宛書簡で、河辺岸三による桑原武夫論を面白いと評した上で、「志賀高原での私との出会いの件は、桑原さんの記憶ちがいかな、河辺君のきき誤りか、どちらかです。桑原さんに初めて会ったのは、昭和十二年——つまり私の大学卒業の年であって」云々と明記しており、さらに河辺宛書簡でも「私が桑原さんに会ったのは……大学を卒業する年でした」としている（それぞれ『書簡集』四卷九七頁、五卷三六五頁）。おそらく丸山は八〇年代後半から、後に「回顧談」としてまとめられるヒアリングに応ずる準備を進める中で個人史を検討し、発哺初滞在についても昭和十二年夏と確認したのであろう。本書簡はその正しさを裏付けている。

○「研究室のアドラッキー版では、“geradem”となつてゐる」。第五書簡の注でふれた法学部図書所蔵の *Das Kapital* の Erster Band および Zweiter Band のそれぞれ一四七頁、一八二頁に小山の尋ねた該当箇所があり、たしかに“geradem”となつてゐる（小山書簡の二枚目の紙背に、丸山の筆蹟でこの巻数と頁数が記してある）。

○「長谷部訳によると」。長谷部文雄訳『資本論』第一巻上（日本評論社、一九三七年五月刊。丸山文庫登録番号087498）二二二頁に該当箇所があり、次のように訳されている（原文の傍点を削った）。「支払手段の通流速度に関する法則からして、その起原の如何を問はずすべての週期的な支払にとつては、支払手段の必要数量は諸支払期間の長さの逆比例する、といふことになる」。この「逆比例する」という個所に*が付され、二二三頁で長谷部が次のように注している。「インスティテュート版（アドラッキー版のこと——編者）では、この逆比例が正比例と改められ、そして『原文で逆比例となつてゐるのは明かに誤記である』といふ、編輯者の註が付せられてゐたが、その後、原文の逆比例が正しい旨の訂正があつた。この場合の問題は、Täuge der Zahlungsperioden」といふ言葉を、支払週期（一週間目とか三ヶ月目といふやうな、支払期限と支払期限との間隔）の長さとして解するか、支払期間（一日間とか一週間とかいふ、その間に亘つて支払が行はれる期間）の長さとして解するか、依存するのであつて、前者が大となれば、支払総額が大となるが故に、支払手段の必要数量はこれに正比例し、また後者が大となれば、支払手段の通流速度が大となるが故に、支払手段の必要数量はこれに逆比例する。しかるに、マルクスの本文における『支払手段の通流速度に関する法則からして、……週期的な支払にとつては』といふ前置きからすれば、右の言葉は『支払期間の長さ』と読むべきであり、比例関係は『逆』でなければならぬのである（下略）。丸山がいう「委細面談」は、こうした長谷部注をふまえた説明だつたと思われる。

〇七（丸山） 一九三八年一月六日（消印）

何たる神の悪戯ぞ！ 君が体を恢復してハリキッテ僕の家に——恐

らく勧誘の——電話をかけてくれたあの晩、スキー中の無理が俄然爆発して四十度の高熱となり、「肺炎に紙一重」の宣告を受けた。御蔭で今日は八度台に漕ぎつけたが、当分絶対安静といふあじきなき次第とは相成った。いまはたゞ床の中で、志賀高原で君の描く美しい(?) シュプールを思ひ浮べることとしよう。目下、之を機縁に発生するであらう家の anti-Ski movement に如何に対抗すべきに苦慮してゐる。そんなわけでトーヤンにもよろしくいつてくれ。それはさうと、石井は野沢に頑張ったがそっちには行かなかったのか。では精々妙技を振ひ給へ。あゝくやしいっ！ 佐夜奈良

〔葉書表〕長野県志賀高原発 咄温泉、天狗ノ湯内 小山忠恕様
東京にて まさを

〔スキーでの無理が祟つて高熱を發し、小山の発咄行きの誘いを断る〕

○「当分絶対安静」丸山文庫所蔵の波多野精一著『宗教哲学』(岩波全書、昭和一〇年四月第一刷發行)の本文末尾には(三一八頁)、「年の始めより肋膜炎を患ひて漸く床を離るゝを許されたる日、一九三八・三・五読了」という丸山のメモがある。本書簡のこの一節とあわせれば、正月初めから二ヶ月間、病床生活を送ったことがわかる。なお『回顧談』上巻二一六―二一七頁にこの時を回想して、スキーに行つて肺炎になり、療養のために半年近く大学を休んだとある。これをふまえて『集』別巻「年譜」四一頁にもその趣旨の記載があるが、実際には四月から職場復帰したようである(本「センター報告」掲載の丸山眞男宛南原繁第四書簡を参照)。

○「トーヤンにもよろしく」。「トーヤン」は天狗の湯の主人・関金治郎の愛称で、この一節は丸山がすでに彼と懇意になっていたことを示す。ここからも前年(三七年夏)の発咄滞在が裏づけられる。ただ金治郎の長男・関金三郎の回想によれば、金三郎は日中戦争開始後間もなく徴兵され、その三ヶ月後に父が亡くなり、その後は母と姉妹の女三人が宿を切り盛りしたという(『発咄清談』「手帖」第7号、二九

―三〇頁)。とすればこの書簡執筆時点でトーヤンは病床にあつたかもしれない。

○「石井は野沢に頑張った」。「石井深一郎のこと」に「石井とある冬に野沢にスキーに行った」というのは、後文に「それは日中戦争がすでに長期化の様相を呈していたころ」とあるから、この時のことであろう(『集』第十二巻六頁)。

〇八(丸山) 一九三八年五月六日(消印)

昨日は僕を待つてくれたさうで全くもって申訳なし。実は兄貴に会つたのでそのまゝ一緒に帰っちゃったわけ。その中ゆつくりだべりたい。ところで今度第二共同研究室が国家学会の本部になつたので小生も引越す事になった。電話は小石川五三五八(ゴミゴヤ)(これは前と同じ)の、三四三番だ。退屈でこまる時はかけてくれ。それから君のアドレスをかいた名刺をどつかへなくしちゃったから済まんが序の節御教示を請ふ。(電話番号も)まづは右御わびと御願まで。

〔葉書表〕麹町区丸ノ内日本興業銀行調査課 小山忠恕様
杉並区西高井戸二ノ三七 丸山眞男

〔研究室の移動を知らせ、転居した小山の連絡先を尋ねる〕

○「兄貴」丸山鐵雄。滝川事件の際に京大闘争に参加。青少年期の眞男は文学映画歌謡新劇等への関心面で鐵雄から大きな影響を受けた。伝記に尾原宏之著『娯楽番組を創った男』(白水社、二〇一六年)がある。

○「小生も引越す」。国家学会の本部が第一共同研究室から第二共同研究室に移るのに伴い、丸山も第二に移ることになったという。この移動の事実は従来あまり知られていない。東京帝大の電話番号の「五三五八」が「ゴミゴヤ」と呼ばれていたこともあまり知られていないのではないか。

○「君のアドレス」。この記述から小山がこの頃（おそらく齋藤精一宅から）転居したことが分かる。それが渋谷区向山町七〇である。丸山彰氏のご教示によれば、父の小山警が定年を迎えて小山家全体が名古屋からこの地に移り、忠恕も同居することになったのであろう。『集』別巻「年譜」四六―四七頁に、小山の妹のゆかりが三八年にこの住所に転居したとあるのもこれと関連する。ただ翌年小山警が死去して、小山家は目黒区宮前町一六六四番地（のち番地変更で六四番地）に転居する。

〇九（丸山） 一九三八年五月二五日

その後御無沙汰。暢気に御勤めのことと思ふ。僕は目下眼のまはる程忙しい。辻（清明）先生にも赤紙が舞ひ込んだんで、とうとう雑誌を一人できりもりするの止むなきに至った。それにしてもこのごろの召集はすごいね。去年の第一補充で残ってる奴は殆ど居なくなった。今朝も森久を送って来たところ。君は検査は何時だ？ 乙にだけはなるなよ。甲に非んば丙だ。今晚宮澤（俊義）さんと飯を食ふ事になって、シューマンのコンチェルト聴けずに残念。石井にはちつとも会はない。亀田は、髪して頑張ってる。橘、名古屋に赴任。晩春寂寥たり。

「葉書表」 渋谷区向山町七〇 小山忠恕様

10. am. 25th. 本郷、丸山眞男

「雑誌編集を一人で担うに至った事情や友人らの動向を報告」

○「辻先生にも赤紙が舞ひ込んだ」。「青年学徒としての辻清明」によれば、研究室に残った政治系の三人の助手のうち、まず佐藤功が「昭和十二年の暮に赤紙召集を受け、札幌の部隊に、ついで北支戦線に赴いた。そうして翌十三年の六月には辻君

が応召した」（『集』第十五卷二三―二四頁）。この記述と本書簡とを組み合わせれば、辻は五月下旬に召集令状を受取り、六月に入営したとわかる。このため「国家学会雑誌」の編集は丸山がすべて負担することになった。なお元学生との座談「丸山先生を囲んで」には、まず佐藤に赤紙が来たあと「その次はくに来たけど、これは翌日解除になった。それから翌年辻君がやられて、助手の二年目の後半になるとほくだけ（残った）」という（一九六六年一〇月、『座談』7、五〇頁）。ここで「翌日解除になった」というのは、「青年学徒としての辻清明」に丸山が「昭和十三年の召集で即日（正確には翌日）帰郷となった」と書いているのに一致し、『集』別巻「年譜」の一九三八年九月の項に「二等兵教育召集により松本市の歩兵第五〇連隊補充隊に応召、即日帰郷」とある件をさしている。一方、前記のように辻の召集入営は同年五一六月でそれは九月の丸山より早いから、丸山が佐藤の後に「ほくに来た」というのは記憶違いだったことになる。

○「去年の第一補充で残ってる奴は殆ど居なくなった」。この一節からも丸山が去年（三七年）受けた徴兵検査の結果、第一補充兵要員とされていたことが分かる。○「乙にだけはなるなよ」。補充要員となり、召集令状がいつ来るかを気にしつつ落ち着かない日々を送る不快を言ったものであろう。

○「森久」。一高時代の同期生、森久弥をさすと思われる（文科甲類一組で文乙の丸山とクラスは違う。「亀田」。一高文乙の同級生・亀田喜美治。亀田は小樽中学を卒業後、一高受験に二度失敗し、東京府立一中の補修科に入学、そこでやはり一高に落ちた五年生の丸山と知りあった。丸山の親友の一人となり、丸山は彼を紹介して永山正昭、岸秀雄とも親しくなった（永山正昭「星之火」一一頁など。みすず書房、二〇〇三年）。「てい髪して頑張ってる」事情は未詳。軍隊生活を叙したものでないようである（亀田いづみ氏のご教示によれば、亀田は身体検査ではねられて入隊しなかったという。「橘」。一高文乙の同級生・橘喬をさす。卒業記念の集合写真（丸山彰氏蔵）で同定できる。

○「シューマンのコンチェルト」。「N響演奏会記録」によれば、新交響楽団はこの年五月二五日に、J・ローゼンシュトゥック指揮により、シューマンのピアノ協奏曲イ短調作品54を演奏している（ピアノ井上園子、日比谷公会堂）。ローゼンシュトゥック（一八九五―一九八五）は一九三六年八月に来日して新響の常任指揮者となり、

厳しい指導で楽団の水準向上に貢献した。当日は他にシベリウスの交響曲第四番やラヴェルの「道化師の朝の歌」（いずれも日本初演）などが演奏された。

〇〇（小山） 一九三八年六月一〇日

その後元氣にて候ふや。小生は相変らず。どうやら模範的な月給取りに転身し了った模様です。

先夜の新響は、当日になって急に中学時代の友人の訃報に接して、通夜に出向かざるを得なくなり、残念至極でした。おまけに御通夜流れて銀座あたりに進出のこと、危惧の如くにして、重ねく遺憾の極みでありました。

徴兵検査二十五日にて、その中何時か色々なことを聞きに参上仕り度く、暇の節御呼出し願へれば幸甚です。

石井はこの頃如何。岡本、江頭等より便りはないかしら。此の頃誰にも会はず、誰にも手紙を書かず、専ら蟄居屏息の体にて、我ながら無氣力に呆れてゐる次第。

岩波にあるジンメルの哲学入門を読みましたか。此の中にあるヘーゲルの生成——乃至運動——の概念の説明に感心した。僕はヘーゲルの弁証法の何物たるかを知らないけれど、此処に無時間的な運動といふ概念のあることを指摘されて、大いに解明されたやうに思ふ。ジンメルといふ奴は元来あまり面白くないが、此の点だけは太いに啓発された。論理的なものと歴史的なものとの関聯に、一つの新しい見方が

可能になったやうな気がしてゐる訳です。

面白い話——面白くもないかも知れんが——一つ。外字新聞の海外市場相場を見てみると、倫敦の対日為替は一志二片（一シリング二ペンス）を下廻って、一志一片7/8位のところだ。つまり同盟の倫敦電報は毎日ウソを報じて居る訳である。事の本質は別問題だが、電報料だけは惜しいと思ふことです。

われながら妙ちきりんな文章で嫌になったから止める。何か面白い本があったら教へて下さい。丸善の切手を貰ったから、何か買はうと思ふのだが、あまり面白さうな本がないので考へてゐる。

研究室の電話番号を忘れたので、手紙を書いた。

さよなら。

眞男様

一九三八・六・一〇・

〔封筒表〕市内杉並区西高井戸二ノ三七 丸山眞男様

〔封筒裏〕小山忠恕

〔銀行員生活の近況とジンメル著の感想、同盟の為替相場報道への疑問を伝える〕

○「月給取り」。東京帝大経済学部を卒業し日本興業銀行に就職したことをさす。

○「徴兵検査」。大学を卒業した小山にさっそく通知が届いたのであろう。先に検査をうけた丸山から様子を聞こうとしている。

○「石井」「岡本」は第四、第二書簡の注を参照。「江頭」は一高文乙の同級生・江頭彦造。卒業記念の集合写真（丸山彰氏蔵）で同定できる。

○「ジンメルの哲学入門」。岩波文庫版で出たジンメルの『哲学の根本問題』をさすようである（一九三八年五月刊、勝田守一・玉井茂訳。第二章「存在と生成」

（文庫版では八八一〇七頁）がヘーゲルの「形而上学的生成」の分析に当てられている。丸山文庫所蔵版では九八、九九頁に折込みがある（登録番号0182389）。

○「同盟の倫敦電報」。『通信社史』（通信社史刊行会編、通信社史刊行会、一九五八年）によれば、同盟通信は「内外の経済ニュース、商況、相場等を集めて、これを……全国主要地の取引所、銀行、会社、商店等へ毎時刻々に速報」しており、この「経済通信」には「為替電報」を含む「海外経済電報」があったとある。おそらくこれをさしているであろう。

○「ウソを報じて居る」。当時の『東京朝日新聞』『株式』欄の「海外電報」で「倫敦為替相場」をみると、連日のように「英日一志二片」と報じられている。

○「丸善の切手」。『丸善百年史』上巻（丸善株式会社編、丸善、一九八〇年）によれば、丸善は明治三〇年ごろから、書籍等と引き換えができる「御進物用切手」を発行しており、これはのちに「商品切手」という名称になった。

〇二（丸山） 一九三八年六月二八日（消印）

篠（ノ）井駅からの葉書、「杉並区西荻窪」なる宛名がよっぽど郵便夫氏を悩ましたと見えて三枚許り付箋をブラ下げて舞ひ込んだ。君に似合はずほどのぼせてゐたと見える。知らず、惜しくも甲種を逸したる憤懣の為めか、はたまた丙種の汚名を免れたる欣喜雀躍の為せる業か。それにしても僕より上席とは驚いた。日本の前途大いに憂ふるに足る。兎も角、小山二等兵の颯爽たる姿が早くみたいもの。

こないだ音楽学校の演奏会なるものに始めて行つたが、なるほどシュヴィーガーがトンガラかるのも無理ないと思った。木管部など、チンドン屋の方がましな位。喘息病みみたいなフルートには全く恐れ入った。目下多忙。

〔葉書表〕 渋谷区向山町七〇 小山忠恕様

まよを

〔受検結果を知らせる小山書簡への返事と音楽学校演奏会の感想〕

○「篠ノ井駅」。信越本線の駅名。小山の実家（父・磐の実家）がある長野県更級郡青木島村から七、八キロの距離にある。おそらく松本で徴兵検査を受けた小山は実家にたち寄り、それから東京への帰途、篠ノ井駅で丸山宛の葉書を投函したのであろう。

○「西荻窪」。当時の丸山の住所は「西高井戸」だが、小山は前に「荻窪」に下宿していたことがあり、二つを混淆して「西荻窪」としたのであろう。郵便局では宛先の同定に苦労したあげく、ようやく丸山の手元に届いたことになる。

○「僕より上席」。徴兵検査の結果、小山は第一乙種合格の判定を受けたのであろう。

○「音楽学校の演奏会」。『東京音楽学校一覽』自昭和十三年至同十四年補遺（東京音楽学校編、一九三九―四一年）によれば、一九三八年六月二五日に日比谷公会堂で東京音楽学校の「第八十四回定期音楽演奏」が行われた。曲目は、シューベルトの「ロザムンデ」序曲、ベートーヴェンのカンタータ「海の静けさと楽しき航海」作品112、アルミン・クナッップの『マリア古潭』、ブラームスの『ラプソディー』作品53、ベートーヴェンの『交響曲第2番 二長調』作品36である。

○「シュヴィーガー」。ドイツ人指揮者H・シュヴィーガー（一九〇六―二〇〇〇）。マインツ州立歌劇場の総指揮者だったがユタヤ人女性と結婚したためナチスに罷免され、日本を経て一九三八年に渡米した。丸山のこの記述は日本滞在中の逸話であろう。

〇三（小山） 一九三八年一月二日（消印）

〔抜刷「スタンプ付手形制度に就いて」（日本興業銀行調査課、一九

三八年十一月)の送付]

〔封筒裏〕本郷区東京帝国大学法学部研究室内 丸山眞男様
〔封筒裏〕東京市麹町区丸ノ内巷丁目八番地(東京中央局私書箱第八四号)

株式会社 日本興業銀行調査課 小山忠恕

○送付状なし。

〇三(丸山) 一九四二年二月一日(消印)

ホッポ・ヴァライエティー

。雪は粉雪、天気は快晴、然り而して我転ぶ。

。どうしてスキーヤーといふ奴はどれも似た様な顔をしてるんだらう。

。琵琶池ヒュッテで井上さん(山スキーの権化、ゆかりさんが知ってる)の聞いた話、——あるスキーヤー曰く、「発哺なんて全然滑る、ところが、じゃないか、あんな処に一個月もゐる奴の気がしれない(これ、実に井上さんのことにほかならず)、大方女中にでも構ってゐるんだらう」と。宿帳を調べると天狗に一泊してゐる。帳場で、満場——といっても井上さんと僕とカアちゃんと雪ちゃんの四人——一致、爾後天狗への出入禁止を決議。

。今日寺島、のぞきの下の直滑降でスキーを折り、有終の美をなして帰る。君のシュピッツェも相当御奉公するね。

。雪ちゃん、足を捻^{ひね}坐して意気すこぶるあがらず。

〔葉書表〕目黒区宮前町一六六四 小山忠恕様
長野県志賀高原発哺温泉、天狗ノ湯 丸山眞男
〔発哺で山スキーに興じる様子と知人の動向を伝える〕

○「琵琶池」。「手帖」第7号、二八頁に掲載された「志賀高原概略図」によれば、志賀草津道路(国道二九二号)をはさんで、丸池の北側に位置する池。「丸池」は長野電鉄・湯田中駅からのバスの終点で、発哺温泉最寄りのバス停だった。

○「井上さん」。未詳。

○「ゆかりさん」。小山磐の四女(忠恕の妹)で、後に丸山の妻となる。

○「カアちゃんと雪ちゃん」。関金治郎の妻とその長女をさす。金治郎が亡くなり、息子の金三郎(おそらくその弟の豊治)も出征して、天狗の湯の経営は彼女らの肩にかかっていた(前掲「発哺清談」参照)。雪ちゃんには、妹の房ちゃんがいて、竹下由美子の遊び友だちだった(前掲第六書簡の注であげた「山の友たち」参照)。

○「寺島」。寺島友之をさすか。大日本図書出版株式会社や中教出版社の編集者となる。丸山文庫には彼からの来簡がある。

○「君のシュピッツェも相当御奉公する」。「Spitze」は山の頂を意味するドイツ語。発哺温泉周辺の山スキー場が小山の紹介で仲間に知られ、スキーを折るような椿事も生じたことをふざけて書いている。

○小山の住所「宮前町一六六四」は、同町六四の小山家の番地変更前の住居表示。

〇四(小山) 一九四二年五月四日(消印)

啓。こないだは御馳走様。

其の後如何。小生は相変らず。

ところで一つお願い。これは、人から頼まれたのだから、序があつたらのことでよいのだが、日本の財団抵当にあたるあちらの制度、と

りわけドイツの *Bahneinheit* の制度について、アチラ語の文献があったら、教へて戴きたいのですが。(別に、専門的に委しく調べた人でもないらしいから、いゝかげんで結構)。

〔葉書表〕 市内本郷区東京帝国大学法学部研究室内 丸山助教授殿

目黒区宮前町五四 小山忠恕

〔日本の財団抵当に対応するドイツの制度の調査を依頼〕

○葉書表に法学部事務受付による「昭和拾七年五月六日受取」の印がある。

○「財団抵当」。鉄道抵当法、鉱業抵当法などの特別法に基づき、事業用財産の全部または一部(財団)を目的として設定される抵当権(「広辞苑」の摘要)。後文に *Bahneinheit* とあるので、小山はとくに鉄道事業の抵当権制度について情報を求めているようである。

〇二五(丸山) 一九四二年六月二日(消印)

前略、石井が去る廿五日に盲腸手術をして、目下、本郷医院に入院中。すこし手遅れになったので化膿してしまひ、あと、二、三週間はかゝるらしい。本人は大に元氣だが、それだけに毎日澄み透る青空を眺めて無聊をかこつてゐる。場所左の如し。

〔東大正門より本郷医院までの経路を図示してあるが省略した〕

〔葉書表〕 目黒区宮前町五四 小山忠恕様

東大法学部研究室内 丸山眞男

〔石井深一郎の盲腸手術と入院先を知らせる〕

○「石井」は石井深一郎。前掲第四書簡の注参照。

〇二六(丸山) 一九四二年八月一日(消印)

暫らく御無沙汰。変りない? 小生はだいぶ変りがあつた。といふのは仕事が一応かたが付くか付かぬ中に、蕁麻疹の猛烈な奴に襲はれ、閉口した。もう殆どいゝが、まだ毎日注射をしてるし、肉と魚は御法度。昨日はとうとうしびれを切らして禁断の実を食ひ、おまけにアルコールまで注入したが、さしたる異状もないから、もう大丈夫だらう。発哺の石井より矢の如き勧誘で、僕も校正終り次第行かうかと思つてゐる、二十三、四日頃になるだらう。bonusをmalusにして馳せ参ずる意図なきや。今年は滑坂を登らねばならぬのに、天狗は相当の混雑らしい。よつぽど暇人が多いと見える。では、奥さんよろしく。

〔葉書表〕 目黒区宮前町五四 小山忠恕様

東大法学部研究室内 丸山眞男

〔蕁麻疹の発病と治癒を知らせ発哺行きを誘う〕

○「校正終り次第」。南原繁『国家と宗教』の校正をさす。本『センター報告』掲載の南原第五書簡への注(六七頁)を参照。

○「bonusをmalusにしつ」。bonus(よい)とmalus(悪い)はラテン語で反対語。ここで丸山は小山に、もらった賞与(ボーナス)を罰金(マルス)のつもりで旅費にあて、発哺に來ないかと誘つてゐるようである。

○「今年は滑坂を登らねばならぬ」。未詳。

○「奥さんよろしく」。小山は一九四二年二月二日に明石清子と結婚式をあげ(三月三日入籍)、実家から近い「宮前町五四」に新居を構えた(丸山彰氏のご教示による)。第一四、一五書簡の小山の住所が同番地になっているのもこれによる。

〇七(丸山) 一九四二年九月三日(消印)

日曜日は雨が降ったので出掛けるのがめんどくさくなり、失礼した。

夏の客が潮のひく様に引上げたあと、山の湯は完全に平素の静寂をとり戻してゐる。番ちゃんや女中連中も猛然な多忙のあと、一種の痴呆状態に陥ってゐるらしい。変ったことといへば、金ちゃんが帳場に坐ってゐること、別館の洗面所のタイルがスマートになったこと、御饋(?)がよく普通の料理屋で出す、小さな漆塗の飯入れに下落(昇格?)したこと位のもの。西館の亭々たる白樺の林、厥平の緩やかなスロープを彩る高山植物、あ、何といふ尽きざる興趣だ。バスは二時半ごろまで丸池行があるから、夜行で来るか、上林に一晚ストップすれば、歩かなくてすむ。花田にも折があったら、さう伝へてほしい。石井は元気。

Auf die Berge will ich steigen Wo die dunkeln Tannen ragen, Bäche rauschen, Vögel singen Und die stolzen Wolken jagen. — aus der Harzreise—

「葉書表」 東京市目黒区宮前町五四 小山忠恕様
信州、志賀高原、発哺温泉、天狗ノ湯 丸山眞男

「夏の繁忙期が過ぎた発哺宿の様子を知らせ来遊を促す」

○裏面写真は「高天ヶ原より志賀山を望む」(小林義治撮影)。

○「番ちゃん」。宿の番頭の愛称と思われるが未詳。

○「金ちゃんが帳場に坐ってゐる」。関金三郎は日中戦争開始三ヶ月後に徴兵され

長期間軍務に服した。この時も復員ではなく、休暇で家に戻っていたものである(前掲「発哺清談」二九頁参照)。「清談」には、兵役を嫌がる友人の相談に乗ってもらうため、昭和一七年に丸山を研究室に訪ねたという記述もある。

○「西館」は「西館山」の略で、天狗の湯からみると、奥滋賀林道をはさんで東館山の反対側にあつた。

○「厥平」。原文にこうあるが「厥平」の誤記か。

○「上林に一晚ストップすれば」。「上林」は温泉地で、「長野」発長野電鉄の終点「湯田中」と、発哺温泉の最寄りバス停である「丸池」との中間にある。ここで丸山があげるのは、夜行列車で長野まで来て、翌朝長野電鉄に乗り換えて湯田中につき、さらにバスで上林温泉まで来て一泊すれば、翌日遅くにそこを出ても丸池まで歩かずにすむというプランではないかと思われる。

○「花田」。一文乙の同級生・花田(黒川)正男のこと。

○独文はH・ハイネの『ハルツ紀行』の序詩。以下に内藤匡訳を紹介する。「山へ私は登って行かう、そこに小暗き樅の樹聳え、小川はさ、やき、小鳥はうたひ、雄々しい雲がみ空をかける」(『ハルツ紀行』四頁、岩波文庫、一九三四年初版)。なおハイネの原文は丸山文庫蔵 *Buch der Lieder* (登録番号 0182660). S. 215 に載っている。

〇八(丸山) 一九四二年一月三〇日(消印)

土曜日は失礼。御想像の如く、堀切来り、二人で菅虎と大島寛一の見舞に行つた。といっても御存知だらうが、菅さんはメンボ(例の鼻にさしこむ棒)を二本も呑み込んでしまひ、先日開腹手術をやつた。幸ひ経過順調だが、先生この春頃から言語障害を起してゐて口がきけず、いたましい感じがした。大島は痔の手術で、偶然にも大槻外科で菅さんと向ひの室に入院してゐる。もう五、六日で退院するらしい。どうも土曜日はとかくお客さんが多いから、来る時は御電話を請ふ。

そのうち昼飯でも喰ひに来ないか。本郷の方がダンゼン有能だぞ。

いひ遅れたが、転出を祝す。暇が出来たら本来の面目を発揮して大に勉強してくれ。

〔葉書表〕 目黒区宮前町五四 小山忠恕様

東大法学部研究室内 丸山眞男

〔菅虎雄・大島寛一を見舞った報告と小山の転出祝い〕

○「堀切」。一文乙の同級生・堀切真一郎のこと。

○「菅虎」。一高のドイツ語教師・菅虎雄。夏目漱石の親友として知られる。丸山が大学進学にあたりドイツ文学専攻を望んだところ、鎌倉の自宅に呼ばれ志望を変更するように諭された（『回顧談』上巻一九〇—一九一頁）。

○「大島寛一」。文科甲類一組に属した一高の同期生。著書に『ある大蔵官僚の回想』（図書出版社、一九九一年）があり、一九三七年大蔵省入省後の経歴がわかる。四一年五月に企画院に出向、同年七月「関東軍特殊演習」の大動員で臨時召集され、新潟県新発田に入営、朝鮮の会寧で初年兵教育を受けた。同年一月二六日召集解除。再び企画院に勤め、四三年に大蔵省に戻った。同年秋に再召集、衛生隊員（担架兵）として南洋諸島の最前線に送られた。最初の入営時に痔を悪くしていたとあり（同著七五頁）、召集解除された一年後に手術を受けたのであろう。丸山はこの見舞い時にナチス評価をめぐって大島と大議論になったと回想している（『生きてきた道』『話文集』続1、四三頁）。

○「転出」。興銀内での小山の配置転換をさすと思われるが未詳。第一九書簡では、小山の住所が「宮前町五四」から「世田ヶ谷区東玉川町一九一」に変わっており、それもこの転出と関係するのかもしれない。

〇一九（丸山） 一九四三年五月二六日（消印）

御無沙汰してるが、その後体の調子はいかゞ。行きたいと思ひなが

ら仕事が重なってどうにも動きがとれない。先日ゆうちゃんにことづけた林ゴとバタ受取った？ あれは亀田が君にやってくれと言ってもって来たものだ。バタはまだ一、二ポンドはなんとかあるらしい。

代金があるのといさゝか恐縮してゐたが、この上必要な様なら今度もって行く。同僚の四宮がやはりルンゲで市川の自宅で寝てゐるので、その見舞のついでに岡本の所へ寄らうかと思つてゐる。とにかく今はキュウく。ゆふべも完全に夜明した。奥さんによろしく。

堀切先日、次女誕生とのことなり。

〔葉書表〕 世田ヶ谷区東玉川町一九一 小山忠恕様

東大法学部研究室内 丸山眞男

〔小山の体調を気遣い、亀田から食品を託された事情を伝える〕

○「体の調子」。後文に「ルンゲ」（肺結核）の文字が見えるので、小山もこの病気を前から患い一時的に悪化したのかもしれない。

○「ゆうちゃん」。小山家で使われていた「ゆかり」の愛称。こうした愛称を丸山が使っていることは、忠恕との関係がより親密さを増したことを示している。

○「ことづけた」。ゆかりがつけていた日記によれば、一九四三年五月一九日に小山藍は三女の井上久子を訪ねるため下関行きで夜行列車で東京駅を発った。丸山はその見送りの場でリングをゆかりに託したという（以上二点は丸山彰氏のご教示による）。小山は体調不良で見送りに行けなかったわけである。

○「亀田」。亀田喜美治（前掲第九書簡参照）。一説に、亀田の母方の祖父母が北海道にいたので、こうした食品を入手できたのではないかという。

○「同僚の四宮」。法学部の同僚で民法専攻の四宮和夫助教授をさす。

○「ゆふべも完全に夜明し」。「東洋政治思想史」の講義準備のために徹夜したことをいう。戦時中の丸山の講義実績については、「戦中「東洋政治思想史」講義原稿」とその「解題」を参照（『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』第8号、二〇一

三年三月所収)。問題はその時期であり、『丸山眞男講義録「第七冊」日本政治思想史一九六七』(東京大学出版会)の巻末に収録された「講義年譜」は、一九九八年二月刊の初版の記載を二〇一七年一〇月刊の二刷で改訂しているが、後者でも一九四二、四三年の講義は、一〇月から翌年一月の開講とされている。一方本書簡と次の書簡からわかるのは、少なくとも四三年に関しては、丸山が夏学期に講義していたことである。夏・冬両学期を通じて講義していた可能性もあり、今後の調査がまたれる。

○「堀切」。堀切真一郎(前掲第一八書簡参照)。

〇二〇(丸山) 一九四三年七月九日(消印)

御無沙汰した。その後いかゞ。僕はやつと講義が終つて蘇生の思ひだが、少々疲労が蓄積したためか、あまりコンディションがよくない。研究室も出たり出なかつたりしてゐる。行かねばならぬ所が溜つて気掛かりだ。六四番地もしかり、岡本のところも然り。石井はつい最近上京したらしいがまだ会はない。田中が帰つて来たし、石井は行くしするから、またクラス会をやるとい、んだが……。尾佐竹(猛)さんの「明治維新」上中、はとても面白いから、まだだったら是非読み給へ。ではいづれ近々。

〔葉書表〕世田ヶ谷区東玉川町一九一 小山忠恕様

本郷区 東大法学部研究室内 丸山眞男

〔講義終了後の近況と友人の動向を伝え、尾佐竹の本を薦める〕

○「六四番地」。宮前町六四番地。小山の実家。

○「田中が帰つて来た」。一高文乙の同級生田中鎮雄(『回顧談』上巻一一六頁に言

及がある)が復員したことをさすか。

○「石井は行く」。卒業した石井は帰郷して結婚したが就職はしておらず、新妻の伯父に誘われて満州鞍山で働くことになった。丸山がいうのはこの満州行きのことと思われる(その後石井は現地で一年も経ずに関東軍に召集されたという。「山陽道・矢掛宿石井家訪問」『手帖』第68号、八二―八三頁での石井絢子氏談)。

○「尾佐竹猛『明治維新』上中」。白揚社出版で上巻は一九四二年、中巻は四三年に公刊。丸山文庫での登録番号は上巻が08595、中巻が08596で、上巻には書込みが多い。

〇二一(小山) 一九四五年六月二日

御無沙汰、真に申し訳なし。

此の前会ってから、既に二ヶ月になる。その間に、東京も随分変わった。東玉川も、宮前町も幸ひに無事だけれど、何れも近火ありで、僕も屋根に上つて一発消しとめるといふ活劇を演じたりした。周囲にあまり罹災者が多いので、まだ一度も焼け出されて居ないことが、あまり運が好すぎて勿体ないやうな気がして、それだけハリ切つて仕事せねばと考へて居る。

体の方は近來えらく好調である。洗足の里の家に居候することにして、疎開やもめの煩勞から解放されたし、母も先月初め長野に帰つて上京には僕と弟だけになったし、赤ん坊も此の六日に無事出産(女の子、朋子と命名した)したし、その上心配して居た荷物も疎開先迄事もなく着いたやうだし、此の処万事順調以上に順調に事が運んで、気が掛りが凡て一掃された関係もある。兎に角、自分乍ら驚く程の元気で

勤めて居るから安心して下さい。

銀行の方も機構改革が実現されて新設の企画室に転属になった。実務には些か遠くなったけれど、相当政治的に動けるし、いゝことにはあまり雑務に煩われないで済むので、有り難いことだと思つて居る。但し近來、本屋がえらく焼けて手近な所になくなったので、一向に本を読む刺戟がない。手持ちの古い本を読み返して居る程度で、益々不勉強の傾向がある。

銀行の広島支店（猿樂町八七、電話広島中二三四〇―一二）に一度寄つて見たら如何。小生より一年あとに大学を出た広津正男といふ男が居て、支店では彼が一番話が解るだらうと思ふ。広津にも手紙を出して置くから、一度外出の時にでも会つてやつて下さい。広島にはもう三年位居るから、あちらでは仲々の権威だと思ひます。

ゆかりが近く広島に行けるかも知れないとのこと。ゆかりに洗足に遊びに来るやう伝えて下さい。

丸山眞男兄

小山忠恕

一九四五・六・二二・

〔封筒表〕 広島市晩二九四〇部隊「さ」 丸山眞男様（速達）

〔封筒裏〕 東京都荏原区平塚八ノ一〇八七 明石和衛方 小山忠恕

六月廿二日

〔空襲による東京の変化と近況の報告、興銀広島支店社員の紹介〕

○「此の前会つてから」。この年三月七日に臨時徴集された丸山は広島陸軍船舶

部隊で暗号教育を受け、四月に同参謀部情報班に配属された。しかし同月下旬に特別休暇で帰京し、病氣の母を見舞うとともに法学部の先輩同僚や杉浦明平、木部達二などに会つて居る。当然小山にも会つたのであろう。なおこの一時帰京は丸山晩年の記憶には残つていないが、丸山夫妻間に交わされた当時の往復書簡（丸山彰氏蔵）等の考証により、その事実が確認されている（『回顧談』下巻の本文一〇九頁一〇行に対する二九一頁の補注を参照）。

○「東京も随分變つた」。五月二五日の大空襲で東京都内の大半が焼失したことをいうのであろう。

○「東玉川も宮前町も」。それぞれ小山が結婚後に転居した家と小山の母が住む家をさす。

○「一発消しとめる」。屋根に落ちた焼夷弾を消しとめたこと。

○「洗足の里の家」。小山の妻清子の実家（明石和衛宅）をさす。その居候になるまでは、妻子を長野の小山実家に疎開させて自分は自炊生活を送つていたのであろう。

○「新設の企画室」。興銀では、軍需融資指定金融機関の拡大と激化する空襲対策のため、一九四五年五月一日に大改革を実施した。企画室は「銀行運営上の諸重要問題につき企画立案を行」う目的で設置された（『日本興業銀行五十年史』日本興業銀行臨時史料室編、一九五七年、六三七頁）。

○「近く広島に行けるかもしれない」。この計画は実現し、七月に広島を訪ねたゆかり夫人は丸山に面会できた。四月初めに訪ねた折には丸山は病氣で面会できず、その話を聞いた一高の同期生・村本周三（主計大尉として同じ船舶部隊にいた）が同情し、彼の周旋もあつて実現したようである。また永山正昭はゆかり夫人の広島行に際して二等切符の購入に奔走し、かつ広島までの旅行をエスコートしている（前掲『星星之火』二四―二八頁）。この支援もこの時のことだったかもしれない。

○「広津正男」。未詳。



昭和9年 東大一高独法会

後列 左から五人目・丸山、一人おいて堀切真一郎、一人おいて石井深一郎、小山、右端・江頭彦造

中列 左端・田中鎮雄

前列 左から二人目・岡本勝、一人おいて菅虎雄、右から二人目・橋喬

収録書簡一覧

- 1 (丸山) 1936年8月4日 入院中の小山に房総避暑地の様子を伝える
- 2 (丸山) 1936年10月16日 留守にした詫びと南原ゼミの準備等の近況報告
- 3 (丸山) 1937年5月8日 徴兵検査受検などの近況報告と小山への助言
- 4 (小山) 1937年7月8日 帰省先からの近況報告と発喃行きの誘い
- 5 (小山) 1937年7月30日 発喃への来遊を促し、『資本論』諸版の校異を依頼する
- 6 (丸山) 1937年8月4日 発喃行きの予定を告げ、小山の質問に答える
- 7 (丸山) 1938年1月6日 スキーでの無理が祟って高熱を発し、小山の発喃行きの誘いを断る
- 8 (丸山) 1938年5月6日 研究室の移動を知らせ、転居した小山の連絡先を尋ねる
- 9 (丸山) 1938年5月25日 雑誌編集を一人で担うに至った事情や友人らの動向を報告
- 10 (小山) 1938年6月10日 銀行員生活の近況とジンメル著の感想、同盟の為替相場報道への疑念を伝える
- 11 (丸山) 1938年6月28日 受検結果を知らせる小山書簡への返事と音楽学校演奏会の感想
- 12 (小山) 1938年11月21日 抜刷「スタンプ付手形制度に就いて」の送付
- 13 (丸山) 1942年2月11日 発喃で山スキーに興じる様子と知人の動向を伝える
- 14 (小山) 1942年5月4日 日本の財団抵当に対応するドイツの制度の調査を依頼
- 15 (丸山) 1942年6月2日 石井深一郎の盲腸手術と入院先を知らせる
- 16 (丸山) 1942年8月18日 蕁麻疹の発病と治癒を知らせ発喃行きを誘う
- 17 (丸山) 1942年9月3日 夏の繁忙期が過ぎた発喃宿の様子を知らせ来遊を促す
- 18 (丸山) 1942年11月30日 菅虎雄・大島寛一を見舞った報告と小山の転出祝い
- 19 (丸山) 1943年5月26日 小山の体調を気遣い、亀田から食品を託された事情を伝える
- 20 (丸山) 1943年7月9日 講義終了後の近況と友人の動向を伝え、尾佐竹の本を薦める
- 21 (小山) 1945年6月22日 空襲による東京の変化と近況の報告、興銀広島支店社員の紹介